令和元年度　多久市立東原庠舎中央校　学校評価結果

資料３－２

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
夢に向かって生き生きと輝く児童生徒の育成 ～共に伸びゆく中央校をつくろう～	1 教職員の協働力を発揮した義務教育学校推進。 2　確かな学力の定着と教師の指導力の向上。 3　個に対応した特別支援教育の充実。 4　地域と共にある学校：コミュニティ・スクール

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

達成度
A：ほぼ達成できた
B：概ね達成できた
C：やや不十分である
D：不十分である

3　目標・評価

①　教職員の協働力を発揮した義務教育学校の推進。

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策	学校関係者評価委員会から：学校関係者評価委員の評価（A～Dで記入）	学校関係者評価委員会から：意見や提言など
学校運営	○教職員の資質向上	学習指導、生徒指導の充実	○新学習指導要領への円滑な移行を行う。 ○生徒指導に関する教職員の意識向上。	○新学習指導要領の周知徹底を図るため、講師招聘の研修会を年2回行う。 ○各教科カリキュラムを見直し、計画的実施を行う。 ○月１回の情報交換会を行い、不登校、問題行動の未然防止、早期発見、早期対応に生かせるようにする。	A	○新学習指導要領で示されている授業改善について、3人の講師の先生の指導・助言を受けることができた。 ○月１回の情報交換会での情報の共有を問題行動やいじめの早期発見、早期対応に生かすことができた。また、意識調査では、教職員の98.1%が「いじめ見逃しゼロ」を目指して指導していることがわかった。	○次年度も年3回の講師招聘研修会を開催し授業改善に努める。 ○SCやSSW、関係機関と連携を強化しながら、担任一人に対応を任せるのではなく、チーム学校として全職員で対応する。そのためにも、今後も月１回の情報交換会を継続し、不登校児童生徒への支援体制づくりを行う。また、いじめなど、問題行動の未然防止を強化する。	A	・達成度Aに安心した。これからも資質の向上に努めてほしい。
教育活動	●志を高める教育	夢に向かって生き生きと輝く児童生徒の育成	○夢の実現に向け、「具体的目標を決めて努力している。」と答える児童生徒80%を目指す。	○全国学習状況調査における児童生徒への質問項目「将来の夢や希望をもっているか。」について、肯定的回答が80%を超えるように、日々の教育活動に目的意識を常に持たせる。また全ての活動は自分の将来につながっているのだと自覚させる。 ○自己肯定感が高められるよう、言語活動を充実した授業実践を行う。	A	○意識調査「夢に向かい目標を決め努力していますか。」について，肯定的な回答をした児童生徒が82.5%であった。目的意識を持たせることを重視した教育活動の展開が成果となって現れたと考える。 ○自己肯定感を向上させるため，「学び合い」を取り入れた授業実践を通して，言語活動を充実させることができた。	○「夢に向かい努力することのすばらしさ」を様々な場面で児童生徒に伝えるなど,学校教育目標を意識した教職員の指導や働きかけを重視した協働実践を強化する。そうすることで、次年度は肯定的な回答をする児童生徒の割合を90%以上に高める。	A	・志、夢を大事にする教育はとてもよい。今後も大事な目標にしてほしい。 ・児童生徒にとっては欠かせない目標である。
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革	効率の良い業務改善によって児童生徒によりそう時間の確保	○時間外勤務時間を1か月あたり前度比80%まで削減する。	○管理職や主幹教諭、指導教諭によるOJTやメンター制度の活用等によって、効率的な教育活動の取組についての支援と指導を行う。 ○定時退勤日を週2回設定し、最低1回は職員に実行させる。	B	○定時退勤日の設定やテレワークの活用等により、1か月あたり前年度比89.5%まで削減することができた。 △月45時間以上の時間外勤務者が毎月複数名おり、さらなる業務の見直しが必要である。	○校内体制を見直し、複数名の担当者で業務にあたることにより、効率化を図る。 ○業務連絡等においては、校務端末の利用促進を図る。	B	・働き方改革には、今後も取り組むべきである。 ・時間外勤務の問題はあるが、先生方は頑張っていると思っている。 ・改善策が個人の効率化のみになっているので業務の在り方についても考えたほうがよい。

②②確かな学力の定着と教師の指導力の向上

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策	学校関係者評価委員会から：学校関係者評価委員の評価（A～Dで記入）	学校関係者評価委員会から：意見や提言など
教育活動	●学力向上	指導方法の改善	○授業において、学び合い学習の効果的実践によって児童生徒の学習意欲を高めていく。 ○学習内容の基礎的基本的な知識・技能の定着を図る。 ○ICT機器を効果的に利活用した授業づくりを行い、児童生徒が「電子黒板等を使った授業は分かりやすい。」と答える児童生徒90%以上を目指す。	○「授業づくりのステップ１，２，３」リーフレットを活用した授業実践を行い、校内研究会の中で検討、改善を行う。 ○前期課程で週4日15分の補充学習の時間である「きらきらタイム」、後期課程で年間70時間の外部人材を活用した補充学習を行う。 ○児童・生徒が意欲的に取り組むためのデジタル教材の活用と、指導法の工夫・改善を行う。	B	○全職員が研究授業を行い改善点を出し合うことで、「学び合い」についての研究が深まった。 ○意識調査では、児童・教員・保護者とも70%以上が基礎的基本的な知識・技能の定着について肯定的な見方をしている。 △学習状況調査の結果では、自分の考えを表現する力に課題が見られた。 ○プログラミング学習の在り方の研修や次年度に向けた年間の見通しをもつことができた。	○効果的な「学び合い」を取り入れた授業実践を通して研究をさらに深め、児童生徒が生き生きと学習に取り組めるよう努めていく。 ○基礎基本の充実を図ると同時に、自分の考えを言葉や文字で表現する場を授業に取り入れることで学習指導の充実を図る。 ○ICT機器の効果的活用により、視覚的・聴覚的に学習内容を捉えさせる取組を推進する。また、論理的な思考を高めるために、プログラミングの要素を取り入れた授業実践を行う。	A	・新たな教育分野であるICT利活用教育、プログラミング教育、外国語の教育に努力していってほしい。
教育活動	○学習規律	学習規律の定着・家庭学習の定着	○学習の心構え「かつお（前期課程）」「はあと（後期課程）」の徹底を図る。 ○家庭学習に毎日取り組む児童生徒95%以上を目指す。	○「おトイレ」「つぎの準備」「かたづけ」、「話を聞く」「挨拶をする」「時計を見て動く」について、学期に1回のアンケート調査を行い意識化と実践力を高めていく。 ○「家庭学習の手引き」を全家庭に配布し、学期ごとに各家庭に振り返りアンケートを調査を行いい、家庭教育力を高める。	B	○休み時間は休憩の時間ではなく、次の準備や教室移動をするための時間であることを、84.9%の児童生徒が意識している。 ○宿題を授業で扱うことで家庭学習の定着につながった。	○学習の心構え「かつお」「はあと」の反省を帰りの会で行い反省を発表させることで、学習規律の徹底指導を全職員で行う。 ○学級活動の時間に「家庭学習のしおり」や「週間学習計画表」を用いて家庭学習の取組方法について考えさせ、家庭と連携して実践させていく。	B	・児童生徒が落ち着いた雰囲気で授業が受けられる学級づくりを行ってほしい。次年度は学級経営の視点を評価項目に追加してほしい。 ・家庭との連携が必要。
学校運営	○教師の指導力向上	教師の授業力の向上	○互いに学び合いながら、自ら伸びようとする意欲を高める。 ○メンターから指示を与えられるだけでなく、自ら考えて授業改善が図れる人材の育成。	○管理職や主幹教諭、指導教諭が日常的に短時間の授業参観を行い、よりよい授業改善が図れるように助言と支援を行う。	A	○全職員が、一人一実践として「学び合い活動」を取り入れた研究授業を行いうことで、授業力の向上が図れている。	○「主体的・対話的で深い学び」を授業改善の視点として、研究授業だけでなく、日々の授業の中でも実践し授業力向上に努める。	A	・全職員が研究授業を行い、学力向上のための研究会が充実している。

③③児童生徒の豊かな心、健やかな体の育成と個に対応した特別支援教育の充実

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策	学校関係者評価委員会から：学校関係者評価委員の評価（A～Dで記入）	学校関係者評価委員会から：意見や提言など
教育活動	●いじめ問題への対応	いじめの防止 早期発見 早期対応 解消	○「いじめ見逃しゼロ」を目指す。	○アンケートや「心のポスト」を活用して、いじめの防止と早期発見、早期対応、解消に努める。 ○QUアンケートを年間2回実施し、分析結果をもとにした研修を行い、学級づくりに活かす。	B	○日頃の児童生徒とのふれあいや観察、また毎月の「生活アンケート」、「中央っ子アンケート」を通していじめの早期発見、早期解消に取り組むことができた。 ○SNSに対するアンケートの実施を行い、保護者への啓発ができた。 ○QUアンケートの分析を行い個々の児童生徒一人一人が居心地の良い学級づくりのために生かすことかできた。	○児童間による些細なトラブルもいじめにつながる可能性があることを全職員が自覚し、いじめ対策委員会で協議していく。「認知」と迅速な対応、早急な教育委員会への報告により、早期解消に努める。 ○家庭における情報モラル(通信ゲームを含む)向上のための啓発を徹底する。児童生徒に、各種集会で指導を行ってきたが、今後も危機感を持って、真摯に取り組んでいく。	A	・児童生徒によりよい環境の中で学び育つことができるようにと取り組んでもらっている。 ・些細なけんかもいじめと認識し、共通理解のもと「いじめ見逃しO」を目指していることに十分納得し、安心した。 ・虐待の早期発見に努めてほしい。
教育活動	●心の教育	豊かな心の育成	○我慢・親切・見つけ・正直・感謝の5つの心を磨く取り組みを全学級・全職員で実施する。	○道徳の時間の充実及び「いのちの授業」を各学年とも年間3回実施する。 ○道徳や学活、総合的な時間において「自問清掃」を理解させ、実際に行動に移させることにより、自己の向上を図らせる。 ○文化的活動を推進し、後期課程の文化部の活動を促進する。	A	○人権教室・いのちの授業を計画的に実施できた。 ○自問清掃で我慢玉・正直玉・見つけ玉を磨く指導を全職員で行うことができた。	○豊かな心を育むために、今後も人権教室・いのちの授業を継続し、自己肯定感・有用感とともに、他者を思いやる心を育てる教育を充実させる。 ○児童会・生徒会や縦割り班活動を充実させるとともに自問清掃、命の授業などを行い、児童生徒の「豊かな心の育成」に努める。	A	・今後も「いのちの授業」を行い、児童生徒の自己肯定感を高められるようにしてほしいてほしい。
		他者との共生	○児童会・生徒会による活動、前期・後期の交流活動を充実させる。	○児童会活動、縦割り班活動を計画的に位置付けて実施する。 ○生徒会、専門部会の活動を計画的に位置付け、実施する。	A	○ブロック集会、生徒会長選挙の立会演説会への5～6年生への参加、生徒会による1～6年生に向けた掲示物など、義務教育学校としての取組への意識の向上が見られた。	○後期生徒会を中心としたさまざまな取組において、学年間の連携意識を高めさせ、児童生徒の自己肯定感の向上とキャリア教育の充実に努める。	B	・今後も義務教育学校として、前期と後期の連携を図ってほしい。
		個に応じた特別支援教育の充実	○個に応じた特別支援教育の研修及び充実を図る。 ○全職員が情報を共有し、個に応じた指導が日常的に行えるようにする。	○合理的配慮の具体的対応及び改善充実の取組。 ○交流学級との連携強化。 ○特別支援教育コーディネーターを中心に、管理職、特別支援担当者、担任、支援員が参加した情報交換会を定期的、臨時的に行い指導の共通理解を図る。情報は全職員で共有する。	A	○「困り感をもつ児童生徒」に対して、職員間や家庭との連携を図り、支援を行うことができた。 ○今年度は、9年間の統一した個別の支援計画・指導計画様式作成へ向け検討を重ねることができた。	○統一した個別の支援計画・指導計画を生かし、適切な支援の充実を図っていく。	A	・特別支援学級が増えている。先生方の手厚い指導に感謝している。
教育活動	●健康・体つくり	健やかな体の育成 望ましい生活習慣の形成	○チャレンジランキングに意欲的取り組む児童90%以上を目指す。 ○生活リズムの確立を目指した取組を、全学級・全職員で実施する。 ○運動部活動の充実。	○授業及び授業外でチャレンジランキングに取り組むよう、ランキングを意識させながら児童の意欲を高める。 ○全学級、全ての授業において、始めと終わりに「立腰」を行う。 ○運動部活動に外部人材を活用し、後期課程の運動部の活動を促進する。	B	○中央オリンピックを開催し、全学年がスポーツチャレンジ（ランキング）に取り組むことができた。 ○前期課程では、なわとび月間やマラソン月間を設定し、体力向上に取り組んだ。体力向上に係わる活動や部活動の推進は88.5%と高かった。	○生活リズムについては生徒指導部と連携し、学校だより等を活用しながら家庭への啓発活動や取組を強化していく。 ○部活動については、今後も、外部指導者を積極的に活用、連携し推進していく。	B	・部活動について、土日のどちらか1日は休むようにしてはどうか。 ・外部指導者に積極的に協力してもらうべきである。 ・改善策が具体的でないので、具体化すること。
教育活動	○強い心つくり	基本的生活習慣の定着	○「早寝・早起き・朝ごはん」が身についている児童生徒100%を目指す。 ○挨拶・返事・履物そろえが、いつでもできる児童生徒90%以上を目指す。	○保護者に基本的生活習慣の確立について、学級通信、学校便り等で啓発活動を継続する。 ○生徒指導部を中心に挨拶・返事・履物そろえができる児童生徒を称賛する場を設定していく。	B	△昨年度と同様に、24%の保護者が基本的生活習慣が確立していないと捉えている。 ○あいさつがきちんとできているという児童・生徒が88.5%であり、ほぼ目標を達成することができた。	○保護者へ、基本的生活習慣の定着に向け、アンケート調査を実施する。その結果を共有し、保健・学年・学級便りを通して啓発を継続する。 ○児童・生徒には、基本的生活習慣の大切さを指導するとともに、学活などで振り返る機会を設ける。また、挨拶・返事・履物そろえがよくできている学級を校内放送で知らせたり表彰したりして、児童生徒の意識化を図り、意欲を高めていく。	B	・24%の保護者が基本的な生活習慣が確立していない捉えている。特に、朝ご飯は必ず食べるように指導してほしい。また、食べさせていない保護者もいるかもしれないので、その調査を行い、家庭と連携して基本的生活習慣の確立を目指してほしい。。
	○「多久に生きる子」の育成	郷土愛（多久愛）の醸成	○全学年で、年間1回以上、「郷土（多久）のよさ」の発見にかかわる学習活動を仕組む。	○「多久学」を、総合的な時間や各教科の時間に位置づけ、論語カルタ等、体験的な学習活動に取り組む。	A	○郷土資料館との協力授業や「校内論語カルタ大会」の実施など，多久に親しもうとする態度を育てた。	○全児童生徒が「多久市」に親しみを感じることができるような学習指導計画を立て、教科横断的な「多久学」の更なる充実に努める。	A	・多久を好きになる、児童生徒の育成に努めてほしい。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策	学校関係者評価委員会から：学校関係者評価委員の評価（A～Dで記入）	学校関係者評価委員会から：意見や提言など
学校運営	○家庭・地域との連携（コミュニティ・スクール）と小中一貫教育の推進	家庭や地域との連携	○学校運営協議会を、年間6回実施し、学校の課題解決や地域連携教育の充実を図る。	○コミュニティ・スクール推進のための校内組織を充実させ、協議会や学校応援団活動の計画、及び運営方法を十分に検討した上で、実施する。	A	○学校運営協議を4回開催し、貴重な意見を頂いた。学校応援団の活動が充実した。	○学校応援団の支援が定着してきたので、年間計画の中に、どの教科で、どれくらいの時間で支援を願うか位置付ける。	A	・複数の応援団に参加している。今後も応援団として協力していく。
		義務教育学校としての小中一貫教育の推進	○義務教育学校の特色を生かした校時表の活用と学校行事を実施する。	○朝の時間は全児童生徒が朝読書に取り組む。 ○前期・後期合同の入学式、交流遠足、ふれあい給食を実施する。	B	○前期・後期職員が共通理解を図りながら、計画的に取り組むことができた。 △前期校時表のパターン数が多く、分かりづらかった。	○次年度の校時は4年生までと5年生以上の、２つのパターンにする。	B	・体育大会は小中合同開催の時期である。 ・義務教育学校としての学校行事は1つの学校として行うのはよいと思うが、時間をかけて、PTAとの意思疎通を行い、プログラムや運営についてもよく考えて、合意を得るようにしてほしい。 ・今まで以上に、家庭や地域との連携が必要。課題によって、どこにつなぐのかが大切になってくるので、SSWや福祉などとの連携、様々な支援制度などに適切につなぐことができるように情報を持つことは大事である。 ・学校は積極的に地域との会合の場に参加し、情報発信をするべき。青少年会議にも、この学校評価を持っていき、意見を聞くとよい。
			○義務教育学校の特色を生かした不登校対策を行い、不登校児童生徒の割合を前度比50%まで削減する。	○毎週火曜日に教育相談、生徒指導連絡会、ケース会議等で情報共有や対応策を共通理解し、不登校の削減を図る。	B	○全職員で、定期的に生徒指導連絡会を行い共通理解を図った。 △不登校児童生徒数は3%程度であり、時間をかけた支援が必要である。	○担任が変わっても、情報を確実に引き継げるようにSC、SSW、関係機関との連携を強化し、粘り強く継続支援していく。		
			○9年間を見通し、キャリア教育の視点から、児童生徒が夢の実現に向かい、自ら学び続けようとする力や、「恕」の心を育む。	○キャリア教育の視点を持ち、3つの学年ブロックが中心となって教育実践を行う。 ○一部教科担任制や前期・後期教員の相互乗り入れ授業を実践する。	A	○「乗り入れ授業」は、家庭科や社会科で行われ、中学年（5～7年）において教科担任制につなげていく。	○中学年において家庭科や社会科だけでなく、図工・美術、体育科など、他教科でも教科担任制を進めていく。		

4　本年度のまとめ　・　次年度の取組

○本年度のまとめ
　確かな学力定着のため、教職員の授業力は確実についてきている。児童生徒の基本的な学習規律や学習習慣確立に向け、次年度は更に家庭とも連携して取り組んでいく必要がある。
○次年度の取組
　義務教育学校の強みを生かした学校行事の在り方や、豊かな心を育むための児童生徒の交流活動を推進していく。

●は共通評価項目、○は独自評価項目